「特集 建設分野の魅力」第8回

住みよい町目指し

建物を構え、まちを築き、安全で快適な社会をつくる。ビルやマンション、道路、橋など、市街地で目に入るほとんどの建造物に関わるのが、建設業の仕事だ。一つの建造物ができあがるまでには、さまざまな職種の、多くの作り手の力が必要となる。職人たちはどのように役割を分担しながら、どんな思いで工事に携わっているのか。兵庫県洲本総合庁舎（洲本市）の建て替え工事現場を訪ねて、活躍する7人に聞いた。

（取材協力＝兵庫県建設業育成魅力アップ協議会）

建設が進む新しい洲本総合庁舎の完成イメージ図

洲本総合庁舎の建て替え工事現場を訪問

洲本総合庁舎　淡路地域の県政推進拠点となる庁舎。築後50年近くたって老朽化したため、新しい耐震基準で建て替え工事中。鉄骨鉄筋コンクリート造り５階建て。淡路県民局のほか、ハローワーク洲本も入る計画。南海トラフ地震にも耐えうる安全性の高い構造にし、津波浸水対策として建物のかさ上げも行っている。

未来につなぐ
つくるひと・まもるひと

現場監督

ものづくり日本を象徴

「柄谷・淡路特別共同企業体」現場代理人
前川　直也さん

10代のころ、神戸ハーバーランドや大阪のアジア太平洋トレードセンター（ATC）など、新しいまちがつくられた。これまでにない風景が広がることに心を動かされ、建設業界に大きな可能性を感じた。高専の建築学科を卒業後、柄谷工務店に入社。入社5年目から現場を任されるようになり「今でも勉強が必要な日々」は続くが「ものづくり日本の象徴の仕事」を実感して工事管理に当たっている。

現場監督の仕事は、現場全体を把握し、計画通りに工事を進めること。洲本総合庁舎の工事に携わる作業員は、現在、1日平均約140人。心掛けるのは、現場に関わる一人でも多くの人と言葉を毎日交わすことだ。かける言葉で適度な緊張感が生まれ、けがや事故が減少すると考えている。一方、天候不順などで計画通りに進まず悩み、眠れない日もあるが「現場で汗を流す職人さんに助けられ、道を切り開いてもらうことも多い」。築いてきた信頼関係があるからこそ、前向きな気持ちで仕事に臨める。

洲本総合庁舎の建て替え工事現場を指揮する前川さん＝いずれも洲本市塩屋2

昨年8月からこの現場で監督を務める。現場近くに仮住まいし、週末に自宅へ戻って家族と再会する生活は1年を過ぎた。「建設の仕事は同じ現場が二つとない、オンリーワンで後世まで形として残る仕事。気の休まる暇はないが、誇りを持って取り組み、完成の日を迎えたい」

タイル工

最初の1枚 今でも緊張

「新地タイル」工事部
中田　全昭さん

屋内外の壁や床にタイルを貼るのがタイル工の仕事。庁舎の建設現場で外壁に黙々とタイルを貼っていたのが中田さん。このタイルは400年の歴史を持つ淡路瓦と同じように「いぶし焼き」の技術で作られた特殊な製品で、庁舎の外壁に象徴的に用いられている。焼き物のため一つずつ微妙に形状の異なるタイル。一定の間隔で貼っていくのは高度な技術が必要だが、この道31年の中田さんが一直線になるよう慎重に貼っていく。「普段扱うことの少ないタイルなので調節が難しいが、地元産の瓦を使い、地元の現場に携われることに喜びを感じる」と笑顔で話す。

南あわじ市出身で、高校卒業後に地元のタイル会社に就職した。就職したころは、風呂やトイレなどの内装の仕事が多かったが、近年は一戸建て住宅の外壁にタイルを貼る仕事が増えた。屋外では高所での危険な作業もつきものだが「仕上がりが丸見えなので達成感はある」という。

特に難しいのはタイルの割り付け。「壁面は必ず誤差がある」という前提で、施工する面積を測量して割り出した中心位置から貼り始めるのが基本だ。途中でミスに気づけば一から貼り直す。「最初の1枚で全てが決まるので、1枚目を貼るときは今でも緊張する」という中田さんだが「一生に一度のマイホームづくり。そのお手伝いをさせてもらえるのは大きな喜び」と感じている。

淡路瓦を模した特殊なタイルを新庁舎の外壁に貼る中田さん

プレストレスト・コンクリート工

後世に残る仕事が誇り

プレストレスト・コンクリート製品がまっすぐ立っているか精度確認をする藤原さん（下）

「キップ」工事部
藤原　武士さん

コンクリートは圧縮力に強い一方、引張力には弱いという弱点を補うのが「プレストレスト・コンクリート」。プレストレスト・コンクリートを使うことで、部材厚を小さくし、柱や梁（はり）の本数を少なくすることもできるのが特徴だ。藤原さんは主にこの総合庁舎のような大空間を持つ建設現場で、工場から運んできたコンクリート製品を設置する仕事に携わっている。

大きいもので1個当たり20トンもあるコンクリート製品。クレーンを操作するオペレーターに指示しながら二人三脚で縦や横方向に並べていく。「同じことの繰り返しで、日々少ししか進まない。それでもつり上げられた部材の下には絶対に入らないなど、危険を伴う作業だという注意は最も忘れてはいけない」と肝に銘じる。

重量物なだけに、縦横に整然とコンクリート製品を並べるのにも技術が必要だ。ずれの許容誤差をいかに少なく抑えられるか。「今回の作業の許容誤差は5ミリ以内と決まっているが、できるだけ小さく抑えたい」。この道22年の藤原さんの熟練のさじ加減で、ぴたりとコンクリート製品が収まっていく。

著名な建築物では、大阪市中央体育館やマツダスタジアム（広島市）などに携わった。「野球のテレビ中継で球場が映るたびにうれしく思う。自ら造ったものが後世に残るのが、一番のやりがい」と胸を張る。

◇兵庫県建設業育成魅力アップ協議会は兵庫労働局、兵庫県、県教育委員会、兵庫県建設業協会、兵庫県電業協会、兵庫県空調衛生工業協会などで構成。

現場で活躍する７人に聞く

職人の力を一つに

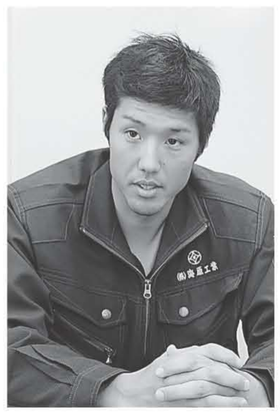
左官工

若手の育成にやりがい

左官工とは主に、コテを使って壁面を仕上げる職人。新庁舎の建設現場で骨組みや壁面ができあがるにつれ、仕上げを行う丸山さんの出番が増えてきた。

建設現場は比較的力仕事が多いが、左官工は力加減を調整しながらコテをさばくデリケートな職種だ。真剣な表情できっちりと平面を出しながら階段脇の壁を塗る丸山さん。

新庁舎の階段横のコンクリートの壁面を仕上げる丸山さん



「二つとして同じ現場はない。毎回違う環境で作業するので緊張感がある」

古くは宮中に出入りを許されて壁を塗っていた左官工。寺社や文化財建築から住宅、大型ビルまで、現代も職人の確かな手作業で壁面仕上げが行われている。

32歳の丸山さんは、若い職人に仕事を継承する役割も担う。会社の年齢構成は30～40代が丸山さんを含め、数人しかおらず、60代以上の職人が多い。10～20代の職人を育てる立場も数人しかいない状況だ。

「左官の技術は一朝一夕には習得できないが、自ら携わったものを多くの人に見てもらえて、張り合いの持てる仕事。技術を伝えるだけでなく、若い人が根気を持って頑張れるようサポートしたい」と話す丸山さん。若手を飲み会やバーベキューに誘うこともあるが、干渉し過ぎないのが大事。〝アニキ〟のような目線で若い職人を育てることにもやりがいを感じている。

「海原工業」
丸山　康太さん

造作工

技術を盗んで技を磨く

造作工は大工の一種で、精密で見栄えのよさを必要とする木工事を行う。新庁舎の建設現場では、エントランスロビーや部屋の壁面に木製パネルを貼るほか、床にフローリングを貼る仕事に従事する。コンクリート造りの建物に木の素材が入ることで、親しみやすさや温かさの加わった空間になっていく。

ニッカーボッカー姿の大工の父にあこがれ、20歳からこの道に入った。木を削るカンナやノミ、釘を打つコンプレッサーなどの工具を使いこなせるまで5年かかった。その間は手の生傷が絶えなかったという。「技術は先輩たちから教えられるものではない。見て盗むもの」と末盛さん。

「宇野工務店」
末盛　雄大さん

最近は新築マンションの内装工事で床や天井、壁にパネルを貼り付けていく作業が増えている。多くの経験を積んだ末盛さんは、インターンシップ（就業体験）で訪れる学生を相手に、箱作りの指導も行っている。

造作工の仕事は現場主義で、事前に木材を大まかに切断して持ち込むが、現場に合わせてどれだけぴったり収めるかが腕の見せどころ。現場で簡単な家具までも製作するのが造作工だ。「カンナで木を削りながら現場に材木をはめていく作業が一番大工らしくて格好いいところ」と笑顔を見せながらも「自分のつくったものにお金を支払ってくれる人がいる。だから責任が伴う。これからもっと腕を磨きたい」と表情を引き締める。

工事現場の脇で設計図面を見ながら合板を切る末盛さん

鉄筋工

丁寧な仕事を心掛ける

新庁舎の屋上で、リーダーとして仲間へ指示を出しながら、手慣れた様子で網目状に鉄筋を組む地下足袋姿の財津さん。鉄筋コンクリート造りの建築現場で、図面通りに鉄筋を組み立てたり、鉄筋同士をつなぎ合わせたりして、最後に鉄筋を結束して固定するのが鉄筋工の仕事だ。

その鉄筋は型枠の中に入り、コンクリートが流し込まれて柱や梁（はり）になっていくため、建物の骨組みをつかさどる重要な部分を担う仕事と言える。財津さんは「1級鉄筋施工技能士」の資格も取得している。

近年は構造物の耐震性がより求められるようになり、使用する鉄筋の量が増加した。

「門野鉄建工業」
財津　顕志さん

直径10～51ミリの12種類の太さの鉄筋を使い分ける必要がある上、完成時には、コンクリートで覆われ、鉄筋は見えなくなるため「鉄筋は人間で言うと骨にあたる。一本でも欠けたり間違えたりすることは許されない。図面をよく理解し、丁寧に誠実に組むことが求められるので気は抜けない」。

幼いころから図工の成績が優秀だった。「組むことが好き」「複雑なほど楽しい」との思いが、ものづくりの道に進んだ原点だ。

「構造物が完成したとき鉄筋は見えなくなるため、発注者の検査は厳しい。この仕事に就いて21年になるが、検査官から『きれいに組めている』と評価されたときがうれしい」と日焼けした顔に笑みを浮かべる。

屋上で鉄筋を組み立てる財津さん

鉄骨工

最も大事な役割を自負

コンクリート建造物の骨組みに使う鋼材は、事前に工場である程度加工してから現場まで輸送し、組み立てられる。洲本総合庁舎のような大型施設の構造を支える鉄骨は、大きいもので重さ約5トン。クレーンのオペレーターに指示を出しながら一つ一つつり上げて運び、溶接やボルト接合で組み立てるのが鉄骨工の仕事だ。

工場で行う加工はコンピューター制御による自動化が進む一方、現場での組み立て作業は経験と勘がものを言う仕事。この道31年の今井さんは「鉄骨が支えているからこそ、超高層ビルが建てられる。建物で最も大事な骨組みを担っていることに、誇りを持っている」と胸を張る。

子どものころ、鉄骨の加工の仕事をしていた父が、自ら加工した鉄骨が使われた建物によく連れて行ってくれたことを覚えている。父を追うように同じ世界へ入り、大阪ドームやハービス大阪のほか、同じ島内の淡路人形座などを手掛けてきた。

そんな今井さんの姿を見て育った長男と三男も、鉄に関連する仕事に就き「親子で仕事談義する時間が一番楽しい」と笑顔を見せる。

「創業以来19年、大きな事故は起こしていない。一つのミスが重大な事故につながることを、息子らのような若い世代に教え、大切に育てていきたい」と気持ちを引き締める。

重さ１トンのH形鋼を上階へ持ち上げるため、指示をオペレーターに送る今井さん

「今井エンジニアリング」代表取締役
今井　眞一さん